

## 自己規定する「前書」あるいは辿り着かない「ルーツ」

——小島信夫「美濃」論

疋田雅昭

小島信夫の問題作「美濃」は、「ルーツ 前書」(一)から(五)、「美濃」(六)～(七)という二部(十三章)構成となっている。合計章数が一つ多いのは、(二)と(三)の間に「モンマルトルの丘」という章が挟み込まれるからだ。

この「ルーツ」という言葉をめぐっては、同時代の「ルーツ」ブームが背景にあったことを別項(『立教日本文学』123号 二〇二〇年一月)で論じている。そこで、本論では、テキストに沿って、「前書」の各章の詳細な読解を試みてみたい。

### 一 書く私と書かれる私

語り手は、(三)章に至るまで名乗らず「私」あるいは「小説家である私」という言い方に終始している。小説上では、評伝を書いた作家、岐阜出身の作家という情報が、テキストの「小島信夫」という署名により読者に結びつけられる。小島は、『私の作家評伝』を一九七二(昭和四七)年八月と一〇月そして一九七五(昭和五〇)年四月にⅠからⅢ巻として刊行しており、ⅠとⅡに関しては刊行年の芸術選奨文科大臣賞(二三回)を受賞している。

また、「しばらく前から、小説家である私に、年譜が必要になった」ため、郷里の人間にこの仕事を依頼したという設定にも相当する事実がある。一九七一(昭和四六)年七月の『小島信夫全集』六巻(講談社)の「あとがき」に

は全集収録の「詳細な年譜」を作成した「平光氏への感謝の意」が述べられているが、この平光善久（一九二四～一九九）こそがモデルではないかと思われる。

平光善久に相当すると思われる人物は、小説中では「篠田賢作」と呼ばれている。小説中には同じ名字のペアが複数組登場するが、名字が一致することと実名の間には何の関係もない。だが、使用される苗字は、岐阜に多く見られるものが多い。

例えば「篠田」は県では岐阜県が全国四位、市町村では岐阜市がおよそ二六〇〇人で全国一位であり、二位の埼玉県三郷市の九〇〇人の三倍近くの数になる。ちなみに「古田」の場合は、岐阜県も岐阜市ともに全国で最も多い地域である（二〇一九年現在）。

小説家「私」は、既に東京で小説家としての名声を得ており、最近出版した作家たちの評伝も評判である。だが、「私」には、自分自身の年譜を作成することと同様に、自らの評伝を書くことは困難であるという思いがあり、前者の仕事に完全に賢作に依頼した形になっている。一方、依頼された賢作はいつか小説家の評伝を書くつもりである。

小説家は、年譜（評伝）を書いてもらうために、能う限りの「資料」を全て賢作に送っている。また、賢作自身も「資料」収集のため、岐阜と東京を奔走している。後に登場する近代文学館と国会図書館は、賢作にとって東京を象徴する場所である。賢作は、地方在住の詩人ではあるが、中央の雑誌に小説が掲載された経験もある。

一方で、小説家は、生涯の大作として残るような地元（岐阜）を舞台にした自伝的小説を書くようにしている。小説家にとって、代表作となる自伝的小説を残すことは大切なことであり、それが地元で文学碑や文学館を建てることに繋がれば、地元への恩返しにもなる。もし、それが成し遂げられれば、年譜を作成していた賢作もまた、故郷のみならず中央へ「一矢報いた」ことになる。自伝的小説を書き上げることと詳細な年譜を仕上げることは、一見異なる行

為に見えながらも、お互いの「野望」は一致しており、以後小説家が、取材のため岐阜に出向くときは、必ず賢作も同行するようになる。

こうした不思議な関係性を語り手はしばしば「夫婦」という比喩で説明するのだが、このテキストの「夫婦」は複雑である。挿絵画家・平山草太郎も、さきの『私の作家評伝』の挿絵を描いている坪内節太郎とほぼ同定可能な設定になっているが、この評伝において挿絵は単なる文章の添え物的な位置にあるものではない。『私の作家評伝』も作中の評伝も、平山（坪内）の絵と古田（小島）の文章の合作であり、それは相互補完的かつ対等な関係である。平山は、古田と同様、既に名声を得ており、二人は多くの岐阜の取材にも同行している。岐阜出身であるが東京に居を構える平山と古田は東京から来る「夫婦」であり、古田と賢作は岐阜における「夫婦」である。どちらも古田を媒介とした「夫婦」であるが、同時に三者はそれぞれに戸籍上の妻もいるわけで現実には三組の夫婦でもある。

こうした物語を統括する語り手は、必ずしも特権的な位置にはいない。後に小説家の名前は「古田信次」であると明らかにするが、語り手は「古田」との関係について、「古田であつて古田ではない」あるいは「古田ではないが古田である」という不思議な言い方を繰り返す。また、実在の人物を彷彿させるキャラクターであつたとしても、読者が「或る人物である」と想定する……といった様な形で多くの周辺情報を与えておきながらも、やはり語り手がその一致を断言することはない。

この語り手のもう一つの特徴として、連載テキストを執筆している「いま・ここ」性を隠そうとしないことが挙げられる。締め切りが近い中、前作までの評判や近況の報告を交えながら、なかなか物語が始まらず、気がつくとも大量の紙幅を消費してしまっている……という展開は、ほぼ毎回繰り返される。語り手と古田は明確には分けられていないから、ほぼシームレスな形で繋がっているのだが、それでも、語り手の（読者に対する）直接的な語りの水準【水

準①」と、古田たちの物語が語られている水準【水準②】は、ある程度分けることが出来る。後者において語り手【水準①】は、それぞれの人物に自由に多元内的焦点化する語り手となって物語を統括している。

だが、テキストにはこの両者のどちらにも当てはまらない水準もある。資料がそのまま提示されていたり、資料を読んでいる者に内的焦点化しその資料についてあれこれ考察している部分である【水準③】。これらは、ほぼ全て実際に存在する資料を基にしているが、登場人物たちが書いた手紙や記録（日記）などは当然ほぼ虚構である。しかしながら、この両者は、語り手と物語の間にあるという意味で、ともに同じ水準にあるとも言える。

また、気分次第で様々な方向に向かってゆく語りによるテキストは、断片化されたもの【拡散的なベクトル】の集積の様にも見える。しかし、同時にそれらはテキスト内部で様々な水準で結びつくこと【統合的なベクトル】により、「美濃」という一つのテキストであることを支えてもいる。

最後の方の章に至ると語り手までもが交代してしまう展開となるこのテキストでは、三つの水準をすべて見る事が出来るのは読者だけであり、その意味では、一見読者のみが客観的な立場を取りうる様にも見える。しかし、様々なレベルでお互いを【相対化】してしまう言説群の漂う中、我々読者に明らかになってくるのは、自らの立ち位置の不安定さのみなのである。

私はもう長い間、郷里の岐阜へ行くと、先ず篠田賢作に連絡する。それからかならず彼の家の書斎かその隣の部屋に泊る。宿の契約を何年も前からしており、これからも永久に契約したようなものである。二日のうちの一日をよんどころなく別のところに、たとえば旅館に泊るとしても、あまり望ましいことではない。私は私の父と出身地を同じうする画家の平山草太郎に私の評伝のさし絵をかいてもらっている。

（数字）は頁数、テキストの引用は、『美濃』（二〇〇九年十一月、講談社文藝文庫）による。

ここからのエピソードは、故郷における篠田賢作と語り手の「夫婦」的な関係を説明するようなものでありながら、そこから唯一の「浮気」（岐阜在住の際に篠田の家に泊まらなかったこと）相手として登場してくることになる平山草太郎との関係を語る。こうして始まる岐阜の文化人たちの物語は、実は岐阜の男たちの物語である。三人の岐阜人たちは、既婚者ではあるが、彼らの妻たちは、岐阜の人間ではない。結果、テキスト内の岐阜ネットワークにおいては常に周縁の存在である。

また、語り手【水準①】はこの「浮気」の際に、篠田から言われた「ほんなら、ええわ」という言葉の「郷里のひびき」に拘る。それは、語り手が以前に書いた「郷里の言葉」（一九六二年一月『新潮』）に同文を小島信夫が掲載に関するエピソード【水準③】を引き出し、以下の様な思いに至る。

私や篠田は、でき得べくんばなるべく郷里の言葉をつかって会話をすべきであり、それをつかって偉大なる自己叙伝を書き、悪い意味ではなく、「夜明け前」がそうであるように郷土を顕彰すべきだ。（26）

このテキストの話題は、記録しようとするものや記録されるもの、中央と地方（故郷）といった問題でありながら、同時に年譜や評伝といった文学や言葉の問題である。そしてそれらは、いわゆる想起的な饒舌体【水準①】で描かれる。だが、こうした行き当たりばったりに見える饒舌体【拡散的なベクトル】は、様々な水準の言説と結び付き合いながら、テキストを構築している。テキストは、「そういえば」に代表される想起的あるいは比喩的な関連性で先へ

先へと繋がりがつつ、さりげなく現れたにすぎなかった文学碑の問題や方言の問題が後に大きな主題として浮上してくることにもなる【統合的なベクトル】。

「昭和五十年十二月五日のことであつた。ほんとうに寒い日のことだ。私は東京からやってきたこの小説家と、やはり郷里出身の画家と一緒に県内を歩いた。（中略）私は東京の連中はもちろん岐阜の連中も知らない沢山のことを知っている。小説家と関係があり、将来秘密となり、難解と称される彼の作品を解く鍵ともなる事実を知っている。（中略）私が何を考えながら、車の中で黙っており、彼ら一行について歩いていたら。何もかも知っているはずの小説家さえもそのわけを忘れていたのは笑止だ。彼らは、気楽に郷土をあらしにきたのだった……」

(27)

古田と連載一回目の終り方は、象徴的である。岐阜における「現実」の「沈黙」は、後に「記録」の「饒舌」に置き換えられる。文章が殆ど語り手による「内容」以前の独白で終わっているのに対して、殆ど唯一の具体的行動といつてもいい、語り手と画家と詩人たちの小旅行の様子【拡散的なベクトル】を、詩人側の「記録」として描いているのだ【統合的なベクトル】。自伝を頼む側の愛憎入り交じる感覚は、頼まれた側にも共感覚として存在していることがよく分かる。

### 三 顕在化する語り手の野望

語り手【水準①】の特徴が最もよく示されるのは、各連載の冒頭である。

本来なら私は、たとえば、先ずわが郷里の岐阜の周辺を歩きまわっているところを楽しげに書きすすめ、筆のすべりもよく浮世の苦勞というものは皆無だといった気分ではいるはずであつた。その分だけ読者を喜ばせているところだつた。信じないかもしれないが、読者を喜ばせることこそ年来の望みだつた。私は、(いつもの悪いくせではあるが)、もう既に蜿蜒と続く作品とするつもりになりにかかつてゐる。

(31)

連載の二回目はこのように始まる。小説の様な描写、言い換えれば、生み出された作中人物たちの行動や台詞を軸として展開される物語を、語り手は基本的には想定しつつも、常に「執筆中の現在に立ちもど」つてしまふ【統合的なベクトル】。連載の一回目を受けて、篠田からの手紙の内容が提示される。

おかしい方ですが、あなたは私どもにとって、すくなくとも私にとっては、時にわが郷里にあらわれる存在であるか、でなければあくまで東京におるべき方なのです。それが不意に夏場だけとはいいながら「山の中」へ移り住むというのは、……

これを要するに(と篠田はもう一度くりかえしている)あなたは私の中にある何某という存在ではなくして、見も知らぬまったく別人であるというふうにも思えるのですが、如何なものでしょう。

(34)

「執筆中の現在」が結果として語り手の空間(長野県)を逆照射している。ここから始まる長い手紙の主旨は不明確でありながら、繰り替えし述べられるのは、第一回目の連載への内容以前(賢作はまだ読んでいないという体をとつ

ている）の感想、いわゆる賢作の語り手に対する「信用」をめぐる所感である。

こうして、読者にとつては相変わらず煙に巻かれたような感覚が続いてゆくのだが、この手紙が現実存在する手紙の引用なのか、創作なのかの区別は読者には最早分からなくなっている【拡散的なベクトル】。

この賢作の手紙の内容を、世俗的に解釈すれば長野ではなく岐阜に来て執筆（取材）しろということになるのだろうか。だが、語り手の反応は、そこにはない。むしろ、第一回の連載の「絶望」や「後悔」を、作中における賢作の「書き方」（描き方）の問題として考え、評伝（的物語）を生み出す際に付随する苦しみとして捉える。

あとに続くモンテーニュの『随想録』やルナールの『日記』に関する考察は、これらの記述行為が生み出す「苦しみ」とともに、記録することによる「快楽」そのものが読み取れる由が伺われる。

以下、賢作に語った（と思われる）長野での「発見」の内容が語られるが、文体上は特に書簡の形式を示したりはしていない。時おり現れる「語った」という文末がそのことを暗示するのみである。その「内容」は、「千メートル道路」を散策した際の岐阜ナンバーのバイクに乗った男と、近隣の公民館における名古屋弁を大声で話す受付の男との出会いである。前者は賢作に後者は弟に似ている、岐阜の顔つきが特徴である【拡散的なベクトル】。こうした「報告」に加え以下の様に語られる。

私は篠田賢作に、この模様を、二、三行で報告した。それから何か自分は長年にわたってあなたに押しつけがましいことをしてきたのではないか、あなたは私にかまわず自分の道を進むべきだ」と書いた。それから、あなたと二人で旅をしたい。御岳でも眺めたい、と書いた。木曾福島で落ち会ってもいいといった。

（傍線部は論者。以下同様）（55）



不思議な内容の書簡である。直接的な内容は傍線部の部分に相当するのだろう。さきの賢作の書簡が不服の申し出であるならば、これは謝罪あるいは言い訳となるのだろうか。

坪内逍遙以来の近代文学の歴史は、描写のリアリティを確保するために如何に語り手を透視化するかに費やされてきたと言ってもよい。我々は、通常の読書行為において語り手の作為を疑うような読み方をあまりしない。故に、研究においては作者と切斷された「語り手」の「意図」を顕在化させようとするわけだが、少なくとも、読書中は、語り手（作者）の執筆上の問題などは、没入の妨げになると考えて忌避しようとする（あるいは全く考えない）。

だが、「美濃」というテキストにおいて、語り手は常に顕在化している。そして読者に直接語りかけてくる。そして、様々な水準の言説をテキストに「投入」しながらも、それを直接的に「統括」しようとはしない。作中人物が実在の人物に相当する様な情報を様々な形で「提供」しておきながら、その人物同定を読者の責任に帰してしまう。こうした語り手【水準①】の頻繁におこなう行為をひとまず言説の「相対化」と呼ぶことにしたい。本論は、この「相対化」の構造を解きほぐそうとする試みである。

物語【水準②】は、この後突然伝えられる、平山が「たおれた」という葉書【水準③】とともに閉じてしまう。両者の話題（賢作と古田の「夫婦喧嘩」と平山のその後）は、このまま次章に持ち込まれるように思えたが、次章はこうした物語【水準②】的な連続性をも様々な意味で断絶してしまうことになる。

#### 四 「美濃」という地の「相対化」

前章につづく章は「モンマルトルの丘」と名付けられている。掲載時も、これだけが『文藝』（一九七八（昭和

五三）年一月）である。前回の『文体』が一九七七（昭和五二）年一二月なので、読者からすれば一月後の掲載となり、次の『文体』が一九七八（昭和五三）年三月であり、そこで掲載されたタイトルは「ルーツ 前書(三)」である。

小説家はもう何年ぶりで消息のあった年少の詩人古田とある私鉄の小駅で待ち合わせた。一つ激励してやろうというつもりである。

彼自身が激励してもらいたがっているのかもしれない。何も古田にそうしてもらいたがっているわけではあるまいが。

(59)

この小説家も「古田」という名前であることはあとで分かる。全てを読んだ上で再読していると見落としてしまいがちであるが、実は冒頭の時点で即座に小説家を「古田」だと考えたり、このテキストが『美濃』の中に位置付いたものであると考えることは難しいのである。

というふうに小説家は書き出した。締切は今日いっぱいにせまっている。約束したからには穴をつくるわけにも行かない。ある会で私は忘れるつもりでいた約束を確認させられた。そのとき私が別の雑誌で「ルーツ 前書」という妙な題の作品の中で書くことになってしまった篠田賢作と同じ姓の篠田数馬に、これまた何年ぶりかであった。

(59)

ここで「ルーツ 前書」というタイトルを見て初めて読者は、別誌で連載されていた二つの章との連続性を考え出

すことになる。一度気がつけば、ここ（『文藝』）で語られる物語にメタな位置で突然表出し、読者に直接語りかけてゆく語り手が、『文体』のそれであるという考えを持たずに読むことは——『文体』での小島のテキストを全く知らない場合を除いて——非常に困難なはずだ。

『文体』で描かれた美濃出身の篠田賢作が『文藝』において同郷の篠田数馬を呼び起こし、『文体』での語り手が『文藝』において「古田」という名字を名乗り、それが同じ名字の同郷の詩人・古田と出会うとするという話である。だが、読者がここで、『文体』における連載との連続性を最も強く喚起されるものとは、その物語【水準②】がほぼ動かないところ、まさに美濃という「ルーツ」をめぐる「前書」であり続けようとしているところである。

篠田数馬に与えられる周辺情報から、この評論家が篠田一士であることが想定される。

「馬籠あたりからのぞむとずっと平地になつて行く有様が見える。そちらが岐阜の方面なのである。つまり草平の育った岐阜の……というようなあの文章は大ゲサで間違っているよ。せいぜい見えたって東濃地方だし、草平の育った岐阜市近辺は同じ美濃でも西濃に近いところで何十キロも離れている。その間にまた山あり谷ありなんだよ。あれは古田さん一流の大ゲサな岐阜しき空想で……」

（61）

引用部冒頭は古田が書いた「永遠の弟子」という森田草平についての評伝【水準③】で、これも既に『私の作家評伝Ⅰ』に収録されている。森田草平と古田（小島）、そして篠田数馬（一士）は全て岐阜（美濃）という土地で繋がっている【統合的なベクトル】。だが、ここで語り手（古田）が拘っているのは、東京在住の二人の物理的距離が近いのにもかかわらず、文学を經由した二人の言説はまるで故郷を經由してくるかのような遅延を伴っていることである。

「岐阜の安八郡の洪水のことは御存知ですね」

どうして私、小説家古田が知らぬはずであろう。あれは輪中の本場ではないか。小説家古田は篠田賢作など何度輪中のことを話題にしたことであろう。ひょっとしたら彼が馬籠からのぞむ平野（といっても、まだまだ高原といった方が正しいことはいうまでもないが）を森田草平と結びつけたのは、輪中といったの平野のことが念頭からはなれなかったからかも知らない。

(63)

「私」という一人称は古田のことであるが、同じ古田を指しながら、森田草平論を書いている時点の古田のことは「彼」という三人称を使う。こうした人称の反転（混乱？）に加え、新聞社からの電話で話題となった「安八郡の洪水」は以前の篠田数馬との対話と結びつき、さらに「篠田」という名字が同じ「篠田」賢作の資料【水準③】の話に繋がってゆくという想起（連想）的展開【拡散的なベクトル】。これら全てに「ルーツ 前書」からの連続性があるといっている。

「輪中根性」をめぐる一連の考察【水準③】は、賢作の資料【水準③】と結びついて長々と続く。「輪中」をめぐる「洪水」の記憶は、数馬との記憶に繋がりがながら、時折新聞社と電話をしている現在に戻る。だが、物語【水準②】は何も動いてはいない。

とにかくそういうわけで小説家の古田は、詩人の古田といっしょに丘をのぼりはじめた。  
「これはちょっとしたモンマルトルの丘といったところだね」

と、いいながら。

「いいや」

と詩人の古田はてれた。

(74)

「そういうわけ」とは、小説家の古田が時折、後輩の数馬に限らず「誰でもいい」ので激励してあげたいと思うということを受けている。これは、冒頭の「詩人の古井」を「激励してやろうというつもりである」という場面と繋がっている【統合的なベクトル】。

こうして読めば、小説家Ⅱ私Ⅱ語り手を「古田」であると定義しつつ、それは同時に現実の作者（小島）そのものではないという設定を明確に述べ【相対化】、それは篠田賢作（平光善久）、篠田数馬（篠田一士）、平山草太郎（坪内節太郎）にも当てはまるものであるとするテキストの世界観は、この章において明確になったといつてよい。さらに、常に物語よりメタな位置に立つ語り手【水準①】を顕在化させることによって語りの現在（の時空）を暗示し、自らが描いた過去のテキストを「引用」するだけでなく、その人物たち（あるいはそれらの人物がモデルとなったキャラクター）からの「反応」をもテキストに取り入れながら執筆中の「心境」をも「告白」してゆくというスタイル【相対化】や、語られる内容よりも語っている側の心情が、比喩や類似性といった形式的な繋がりによって「饒舌体」として述べられていく構成も、ほぼこの章にて完成している。

さらに、「モンマルトルの丘」という比喩は、長良川と木曾川に挟まれた岐阜中心部の地形を、パリのモンマルトルの丘のそれと重ねるだけでなく、岐阜の文化人たちをめぐる物語の舞台を、同様に沢山の芸術家を輩出しているモンマルトルに重ねているのである。モンマルトルの丘の標高は一三〇メートル、岐阜中心部北東部に広がる山が

一〇〇〇二〇〇メートル、双方とも複数の寺院を有し、山中から花街に繋がる古道がある。

テキストは、「美濃」という地に拘るものでありながら、その実「美濃」は世界中の全ての地の謂いであることを再三述べている【統合的なベクトル】。

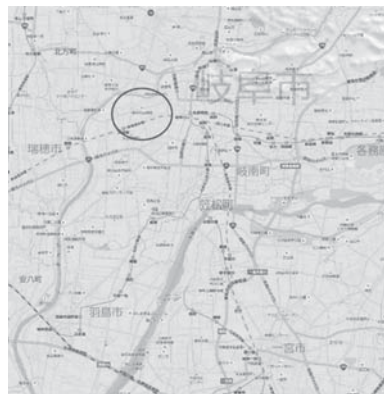
そういった意味でこの回を『美濃』全体の一章と見做すことは容易であるが、もちろん『文藝』において独立したものだけを読む読者に同様の考察を促すことは無理である。だが（故に）、次の章では、その「接続」性を「回収」するところから始まることになる【統合的なベクトル】。

#### 四 「美濃」というテキストの抵抗

読者は読まれたかどうか知らないが、新年号の『文藝』という雑誌に「モンマルトルの丘」という題の文章を書いた。幸か不幸か「モンマルトルの丘」に登りかかったところで締切が来て、ひとまずやめざるを得なかった。

(79)

この章で具体的に語られる物語【水準②】は、以前の章において脳溢血で倒れ奇跡的に回復した平山草太郎とともに各務原を探索する話である。語り手の背景には、最近強い興味をもつに至った各務原への関心がある。それらは、



『岐阜県史』『各務原市史』『郷土研究・岐阜』といった各務原の郷土研究【水準③】などからの「知識」により触発され補完されている。各務原は、古田の父母の在所でもあり平山草太郎の在所でもあるが、そのことがより一層彼らの「ルーツ」としての歴史性を前景化させる。

ここでの「岐阜」の人への拘りも、言葉（訛りや方言）と顔つき（鼻と口もと）に集中している。また、やや紙幅をさいて「説得」しているのは、篠田賢作を岐阜の人間の代表として描いているわけではないことだ。語り手にとって岐阜（美濃）とは単なる自らの「ルーツ」であるだけではなく、「ルーツ」として描く対象である。または、小説家が故郷を描くことは、自らの「ルーツ」と向き合うことであると言ってもいい。だが、自らの痕跡を「集め」そして「整理」するという作業をすべて任じた関係である賢作は、少なくとも小説家である語り手にとって、「ルーツ」に至る唯一の道であり、それ以外の道など存在しないことを様々な比喻を通して何度も語り直す。

だが、賢作を美濃と重ねることは、ひいては美濃を通して世界中のあらゆる郷里と都市の関係を重ねることになる。それは、語り手の「実感」ではあるが、それを読者の「実感」として引き受けさせようとするのが、この「美濃」と呼ばれるテキストの戦略であるのだ【統合的なベクトル】。

もちろん、この章で、偶然在所を同じにしている評論家・野村進が出て来ることは注目すべきだろう。この人物もモデルを想定すれば平野謙を指すことは間違いない。だが、この号の『文体』が出たあとの一九七八（昭和五三）年四月三日に平野が死去したのは偶然の出来事であらうし、次号の『文体』（六月）に掲載された章が、平野の追悼文依頼をめぐるエピソードを中心に構成されているのも、結果論でしかないが、テキストはより興味深いものになったことは事実である。

さきの郷土への関心を高めた語り手たちが目指すのは、「久々利宮趾」であったが、この「久々利宮」の場所とは

可児市なのか西濃なのか歴史学者たちの間でも議論の決着をみていない【相対化】。むろん、賢作もこの場所を的確に導くことは出来なかった。だが、それはもちろん知識不足であつた訳ではない。

美濃は三野であり、三野とは、青野ヶ原と関ヶ原と各務ヶ原と三つの原であるらしいということを私が知つたのは、この文章を読んだことであるが、おそらく篠田賢作らはもちろん、中嶋祥雲堂も、それから図書館長も、その他数えきれぬ岐阜在住の人々がちゃんと知っていたにちがいないのである。「くぐりの宮」が可児市か西濃かというようなことも、土屋氏のようなよその生まれの人が、戦争中から何度もやってきてはしらべており、ずっと問題になりつづけ、今なお問題はつづいていていうのに、古田先輩は何とノンキなことであろう。篠田はそういうだろう。

(103)

むろん、古田自身も、自らの知らなさを知るに至つてはいる。だが、問題はその後だ。「古田先輩は何とノンキなことであろう。篠田はそういうだろう。」あたりを基点として、語りの主体は篠田賢作に入れ替わってゆく【相対化】。

いつたい各々が各務に変わったのはいつのことだか、知つてはいまい。和銅四年の指令によるのだ。ぼくはあなたという人間をそのような視点ですつと過去からみて存在のありようを考えているのだ。今にあつといわせてやりたい。自分を忘れてあなたに一泡ふかせてやりたい。ああそれが出来たら、どんなにいいだろうか！

(104)

自らの故郷を「ルーツ」として見出そうとする眼差しが歴史研究的言説【水準③】と出逢う時、本来不可避である



はずの自己言及性から自由になっているような錯覚に陥る時がある。だが、近代的な意味で「歴史」が可能となるのは、いつも分析対象から特権的にメタな位置にいられる時である。それこそが、歴史の終焉を意味するのかは分からないが、少なくとも、我々が語ることが出来る歴史とは、語られる対象が知らないことだけである。

我々が記憶にない自分のことを知るには、それを見ていた人々の記憶に頼るしかない。知らないから信じるしかないのである。だが、そうなのだとしたら、語られる歴史の信憑性は、誰（何）によって支えられるべきなのか……。

人が——自らのことは特に——信じたいことだけを信じようとする存在であるのならば、ルーツ（歴史）をめぐる賢作と古田の関係性は、不可避かつ本質的なものである。

これを歴史の不可能性と捉えるのならば、「美濃」とは、起源を追求しながらも、それらの言説が互いに相対化され、テキスト全体では歴史（起源の追究）の不可能性を語っているテキストなのである。

前掲した別項で詳しく論じた様に、同時代の「ルーツ」ブームを受け、個人レベルにまで様々な起源追究がおこなわれた。それは、己が見出したい起源を見出そうとする主観的な行為であるのにもかかわらず、文化人類学や歴史学などの言説と結びつき、ある種の「客観性」を捏造していった。「美濃」とは、こうしたテキスト群において、初めて理解できる抵抗言説なのである。

## 五 「現実」の介入 あるいは 接続される「現実」

「ルーツ 前書(四)」は、平野謙の死去の話から始まる。同郷の作家でもある小島（古田）の元には様々な「追悼文」の依頼が舞い込む。「ルーツ 前書」の締め切りを間近にしながら、なかなか「本題」に入れない（入らない）のも既に常態となっている。四カ所の依頼を受けている様子から、依頼を受けた編集者たち（おそらくは『すばる』と

喜多見駅（平野の家の近所）そばの喫茶店で「ルーツ 前書」「モンマルトルの丘」について話をする場面が「本題」【水準②】であるとする、残りは依頼を受けながら考えたことである【水準①】。

実際に依頼を受けて書いた四誌は、『近代文学館館報』43号（一九七八（昭和五三）年五月）、『すばる』35号、『海』10巻6号、『文藝』17巻6号（同年六月）である。テキストを注意深く読めば、どの依頼がどれにあたるのか同定可能である。

電話のやりとりの中で浮かぶ話の中で注目されるのは、M・フーコー『言葉と物』（一九七四（昭和四九）年六月、新潮社）の有名な序文の引用だ【水準③】。

そのテキストは、『シナの百科辞典』を引用しており、そこにはこう書かれている。『動物は次のごとく分けられる。〈a〉皇帝に属するもの、〈b〉香の匂いを放つもの、〈c〉飼いならされたもの、〈d〉乳呑み豚、〈e〉人形、〈f〉お話に出てくるもの、〈g〉放し飼いの犬、〈h〉この分類自体に含まれているもの、〈i〉気違いのように騒ぐもの、〈j〉かぞえきれぬもの、〈k〉ラクダの毛のごく細の毛筆で描かれたもの、〈l〉その他、〈m〉いましがた壺をこわしたものの、〈n〉とおくから蠅のように見えるもの。』

(112)

通常、近代的な分類の「客観性」そのものを疑義に付すような問題と結びつけて議論される箇所であるが、テキストでは、ある編集者の言った言葉が問題とされている。それは、三重県出身の男は「医者と坊主と老人がいちばんしやうがない」という言葉であるが、ここで人間の世代分類の問題を考察し、自らが「老人」であるという確信を得る。だが、「老人」の意味にも「猿」と「元老院」という二重性があり、そこに文学的な意味での「愉快でない」感覚を

覚えたというものである。このテキストでは「文学的」という語彙がしばしば出てくるが、多くの場合、両義的な意味を含むこと【パラドックス】を意味している。

こうした「感想」の範疇では、いわゆる「分類」に関する考察であると言えるが、興味深いのはその後の結論である。

これまたよいなことであるがひょっとしてこれこそ、私どもの人生を生きる姿そのものなのかもしれない。三重県の男の電話については、「老人」とはつまり私のことだということだけをいっておこう。そのときその男がそうハッキリ思っていなかったことはいうまでもないが、そんなこと問題でない。彼は思っていた。

(115)

ある言動の意味が発話した本人の記憶（意図）と関係なく決定されてしまう瞬間である。歴史的言説が個々人の意図よりも、時代を大きく包むエピソードによって支配されている面を重要視して、フーコーが既存の歴史観を脱構築していったことは有名だが、少なくとも引用部の「私ども」を「古田」に代えてみれば、本人の知らないこと、忘れてしまったことが、歴史として確定されてゆく過程、それが年譜（古田の人生）だったと言つてよい。

何だつてこんなに頼んでくるのだろうか。ほんとうにあの評論家の野村進氏を平野謙と思ひこんでいるのだろうか。それなら小説家の古田は私なのだろうか。それでは篠田数馬は誰だというのだろうか。平山草太郎は坪内節太郎だというのだろうか。ではあの私がダシにしているようにも見える賢作は誰だというのか。いったいダシになど出来るものか。あのような人物が岐阜にいるのだろうか。いったい岐阜とは何だ！ そんなもの、この日本にほん

とにあるのか？

(116)

繰り返されるモデルと作中人物の問題であるが、これをフーコーに倣って「同定」の問題として見ても面白い。確かに、現実にいる人間が物語のキャラクターを生み出したのだろう。しかしながら、読者が知っている人間が本当にその人間であるという保証はどこにあるのだろうか。あくまでも、古田（あるいは小島）が生み出したキャラクター（野村進）は、古田が知っているその人物（平野謙）から生み出されたものだ。読者の知っている平野謙に全て重ねられるわけではない。

思考の中【水準①】でもう一つ注目すべきなのは、近代文学館との関係を『詩学』の「模倣」あるいは「悲劇」の「運命」として考えるくだりである。近代文学館の維持会員でもあった古田（小島）は、その評伝の資料収集に頻繁に文学館を利用していた。また、賢作（平光）も東京の調査にしばしば同地を訪れている。

誰がオイディプス王のような目にあうことを望んだりするものか。ところがそうではないのだな。私なる作者よりも、古田そのものかな？ 誰でも人はマネをしたがるものだ。他人になつてしまいたいものだからな。そもそも何だ。英雄とはなりたいたいと思う他人になることだ、ということである。

(121)

これは、単なる一般論ではない。古田は賢作の創り出す古田を求め、賢作はそうなりたい自分自身を古田から探しだそうとしているのだ。そして、古田や賢作の営為の向こう側に、美濃の人々が、美濃そのものが立ち上がってくる。立ち上がってくる人物・美濃の資料も近代文学館から見出されテキストになって美濃へ、もちろんその逆も……。そ

して、そのモデルの人物の死が、新たなテキスト（追悼文）の依頼として小島の元にたどりつき、そのいきさつそのものが「ルーツ 前書き」の中に回収されてゆく……。

取り込んだ「ルーツ 前書き」は、いつもの様に思索から「現実」（本題）へと戻ってゆく【水準②】。編集者たちと同席する平野謙の自宅近くの喫茶店の表象に、「編集者」「依頼」「引き受ける／受けない」「運命」「模倣」といった全ての命題が滑り込んでくる。

彼らは「ルーツ 前書」や「モンマルトルの丘」のことを話した。もっと軽薄なことや、いたずらに空中に投げるだけの言葉を放ったりした。何しろ彼らは、よくいえば、望むと望まぬとにかぎらず、仕事の虫だった。彼らは岐阜のことを口にした。なぜかという、そのうちの一人は岐阜へ仕事のことで出かけたことがあったからである。いよいよ話は軽薄に流れ、汚れてきた。そのとき編集者は、次のようにいって、私を絶望させた。

「ひとつ、小説、平野謙というのを書いてもらえませんか」

(126)

ここまで読み進めてしまうと、ある種の「理想的な読者」（W・ブース）となってしまうのだろうか。平野謙の死という偶然的出来事を取り込んだこの章までで「ルーツ 前書」というテキストの「型」が確立したような気がしてくるのだ【統合的なベクトル】。少なくとも語りの現在の外部参照という問題に関しては「モンマルトルの丘」が重要な役割を果たしていたことは間違いないだろう。結果、一種異様な形ながら、「ルーツ 前書き」というタイトル連続の中に「モンマルトルの丘」というタイトルを有したまま、このテキストは「取り込まれた」。まるで、森田草平の実事件が漱石の小説に、そして草平自体に取り込まれたように。

## 六 閉じられる「前書」あるいは「ルーツ」としての「美濃」

だが、こうした外部参照が突発的な出来事であったかの様に、あるいは、まだ積み残した話題があったかの様に、次の「ルーツ 前書(五)」(一九七八(昭和五三)年九月)では、以前古田が賢作に送った手紙の内容が引き継がれる【統合的なベクトル】。

当初予定していた岐阜と長野の境界(基礎駒ヶ岳)ではなく、字浅間山での落ち合うことになったいきさつを語りだす【水準①】この章の「主題」【水準②】は「仲直り」のための「散策」である。

御岳を眺めたり、御岳のことを口にしたりすれば、二人は一種の仲直りが出来る。何の喧嘩をしたか、ということになると、小説家自身もよくは分らない。喧嘩などしたおぼえはない。賢作はいつそうおぼえないというかもしれない。それならどうして喧嘩が行われ、そうして仲直りすべきだ、と思い立ったのであろう。そこがたぶん問題なのだ。そのことが前提となれば、どんなに木曾駒高原がふさわしいところかということも、いくぶんかは読者に理解いただけるといえるものであろう。

(130)

読者は、以前賢作から古田に送られてきた書簡の内容が何かしらの不服を申し立てていることは理解出来ても、その内実は今ひとつ掴めないでいたはずだ。また、その「不服」を古田自身がどうにかすべきことだと考えていることも理解出来るが、そのために二人が何故「木曾駒ヶ岳」で落ち合う必要があるのかは、この地が両者の境界に位置していること以外には分からない。とにかく、「主題」は二人が字浅間山で落ち合う物語だ【水準②】。

既に常態になっている様に、実際に落ち合つて「散策」する以前に「思索」のみがどんどん進む【水準①】。まずは、古田が見せに持ってくるという「ガリレオの肖像」（『自由』一九六一（昭和三六）年一月）の原稿【水準③】をめぐ、るそれである。ここには、多くの地元の無名の人物達が登場するが、それらが古田は言うまでも無く賢作にも密接な関係性を有することは、地方の狭い街においては、当たり前のことである。テキストでも以下の様に述べられている。

古田の岐阜での交友範囲や生活の範囲の八割がたは、賢作につながりがあり、つながりがない部分に対して、う、らめしい顔をしたことは前に述べた通りである。どこまで本気か知れたものではない、と読者は思われるであろ、う。しかし十割そっくり本気だということが今の世にあるだろうか。

(134)

この短編のモデルで最も重要な人物は矢崎剛介であるという。この詩人のモデルは殿岡辰雄（一九〇四―七七）である。土佐生まれで関西の大学から古田のいる中学校に新任教師としてやってきた人物の重要性は「圧倒」という言葉とともに「慎重に」語られてゆくことになるのだが、「やがて詳しく物語ることになる」として、物語の場面は、元のシーン（本題）に戻る【水準②】。

岐阜出身の小説家古田と東京出身のその妻とが追分の駅で、賢作が到着する時刻に待っていた。自動車にのる女、が、車をおりてからカギをぶらさげて歩く姿勢というものは、何か独特のものがあるようである。もつとも十五、六年前に古田が彼女といっしょになったときにはもうそういう歩き方をしていたのだ。

(137)

しかし、ここでも話は、賢作の送ってきた『郷土研究・岐阜』に掲載されている輪中論の考察に向かってしまう【水準③↓①】。こうしたパターンは、これまでのものと同様ではあるが、様々な学者たちのテクストを踏まえた上での古田の「輪中エゴ」についての考察は興味深い。

輪中の場合でも、あの村もこの村もこの天災をどう最少の被害でくいとめるかのために、血の出る思いで結論を下し、善処し、小をすてて大につき、ただ自分のためになればよいというのでなく、たとえ一時的に自分のためになったとしても、忽ちどこかでその報いをうけるのだから、そんなノンキなことをいつていられるものではない。（中略）まるですぐれた小説作品の場合のような配慮が行きとどいて、大昔から存在してきた人間は、垢もあるが智慧もあり、それに新しく生をうける人間が否応なしに初心に戻る役目を果してくれる。

(141)

輪中における互いのエゴは、一方的な損得という形に終始せず大きな目で見れば循環している。そして、それは「小説作品」と同じ構造性を有しているという見方は、「美濃」という小説で描かれる多く人々にも普遍化される【統合的ベクトル】。また、この思考自体が、「仲直り」という行為の中で行われていることも重要だろう。賢作と古田の循環は止まることも閉じることもないのである。

なぜ白昼夢が起ったのか？ 古田が「ルーツ 前書」というのをつい書きはじめて、そのなかに賢作のことが扱われていたからであろうか。たとえそうとしても、そのことのためではない。くりかえしているが、喧嘩をしたおぼえは一度もないのである。それが仲直りせねばと思うのは、喧嘩をした結果と同じようなものが、あらわ



れたように感じられたからであろう。しかし、そういう思いを古田は口にしたことは一度もない。「ルーツ 前書」の中においても、喧嘩をしたというような場面が書かれているだろうか。ある思いや、空想は書かれてはいる。賢作を傷つけさえたかもしれない。しかし、あれがほんとの賢作だろうか。あれを賢作そのものだと誰が思うか。なるほど賢作をモデルにした。

(145)

喧嘩した様な「結果」が喧嘩したという「事実」を、モデルにした話として読まれたことがモデルにしたという「事実」を生む。だが、それは「事実」なのだろうか。

思考は理路整然としてはいるが、常に循環的である。だが賢作は「古田に関心を抱きつづけざるを得ない」し、古田も「賢作に対して、思い出したようにおせっかいをやきたくなり、そうしてふいに仲直りせねば、とこうふしぎな気持ちにかられる」。また、この循環は、賢作と古田を見つめる賢作の妻にも同じ様な感慨を抱かせる。

彼女は賢作と古田の二人に順々に視線を送る。(中略) 同じような仕事をする二人の岐阜人というものがこうして集まっていることによって、その仕事も、岐阜というところも何ものか意味あるように思える。岐阜は、ひょっとしたら東京の一部であるか、それ以上であり、東京も岐阜そのものであり、世界はこの書斎から始まって、この書斎に終る。そう思いこむわけではないが、そう思う彼女自身がほほえましい。彼女もまた、日頃の賢作の妻であるというよりは、もっと自由な存在であって、たまたま賢作のところにきているだけのことである。

(146)

以前に、古田が賢作との関係を「夫婦」として考えていたことを考えれば、至極当然の帰結であるのかもしれない

が、やはり、岐阜（美濃）も東京も当然の様にこの循環に取り込まれる。以後、二人の「仲直り」は「夫婦」という比喩を伴って美しく描かれる。

篠田賢作は、夏に岐阜ナンバーのバイクでやってきた男がうずくまっていたのと同じようにうずくまっているように見えた。じっさいは賢作は畳のうえに坐っており、あの男は正真正銘、蜂の巣をねらってうずくまっていたのであったが。賢作は顔をあげて、くるり一回転してこちらを向いた。彼は手の中でこれから古田に見せるはずのものをくりかえし眺めていたのであった。

(152)

章の最後は、以前の章と結びつく。ここで賢作が見ているものは、この章で先ほどまで話題になっていた「ガリレオの胸像」の原稿である。賢作の鞆に目をやれば古田に関する「資料」の山である。構成は、二重に循環している【統合的ベクトル】。

見ぬ前から、その気になれば、そこにそうしたものが入っているということは、すぐに想像のつくことであった。しかし、彼は途中の紅葉の変化のことを主として語りつづけ古田の山の家のたたずまいや、雪にとざされるぐあいのことを考えているように見えた。彼の頭では降雪量は、飛騨の高山と同じくらいかそれ以上であるはずだというようになっているらしいので、それを訂正しようとする、氣にくわぬ表情をしてみせた。

(152)

美濃に住む賢作の記憶に東京の古田が影響し、東京に住む古田の美濃の記憶に美濃の賢作が影響せざるを得ない。

お互い不可欠な存在でありながら、愛憎入り交じる関係は終わることはない。

次号の連載を読むと、いわゆる「ルーツ 前書」という章はここで突然終わっていることが分かる。ここまでで、「ルーツ」や「前書」の意味を了解することは困難である。

次章以降の「美濃」に対して、いかなる意味で「前書」であるのか。何故に「ルーツ 前書」なのか。「前書」と「美濃」の関係を考えることは、【ベクトル】【相対化】【水準】の意味をより深く考えることと繋がる。だが、ここまでは、「美濃論」の「前書」である。